



Title	第9回 ウィリアム・モリス研究会
Author(s)	吉村, 典子
Citation	デザイン理論. 2025, 86, p. 62-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102496
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第9回 ウィリアム・モリス研究会

日時：2024年11月30日（土）12:50-17:00

場所：せんだいメディアテーク（伊東豊雄設計）7階 スタジオシアター

主催：意匠学会 後援：宮城学院女子大学英文学科・生活文化学科

本研究会は、意匠学会の研究部会として、ウィリアム・モリスに関する研究をめぐって学術的な議論を交わす集まりで、年一回開催しています。世界のモリス受容や、モリスに関するある内容についても発表もできます。意匠学会の分科会ですが、会員以外の参加者にも開かれています。

2024年度は仙台で開催し、東北はもちろん、関東、中部、関西から発表のお申込みをいただき、モリスにかかわる様々な領域の研究発表会となりました。意匠学会会員以外の仙台ゆかりの方々にもお越し頂きました。「仙台近代デザイン研究会」会員各位のご来場・ご協力を賜り、斎藤広通事務局長からは来場者向けに、建築をめぐる「仙台街歩き」マップをご提供くださいました。また、会場が「せんだいメディアテーク」であることから、後援の宮城学院女子大学・安田直民教授より、学内の伊東豊雄設計「森のこども園」についてもお話し頂きました。

各位のご尽力により、「モリス」、「仙台」、「デザイン」、「建築」をめぐって、参加者どうしの交流を深める大変充実した機会となりました。

吉村典子（宮城学院女子大学）

プログラム

【はじめに】

12:50-13:00 仙台とデザイン

吉村典子 | 宮城学院女子大学

伊東豊雄設計・森のこども園（宮城学院女子大学付属認定こども園）

安田直民 | 宮城学院女子大学

【第1部 モリスと同時代の人々】

発表1 13:00-13:30 中世観の相違

—— ウィリアム・モリスとジョージ・エドモンド・ストリート

江澤美月 | 一橋大学

発表2 13:30-14:00 アーツ&クラフツの詩

—— ウォルター・クレインによる詩と絵画の融合の試み

関 良子 | 三重大学

発表3 14:00-14:30 ラスキンとモリスに見る生の循環の思想

横山千晶 | 慶應義塾大学

【第2部 モリスと社会主义】

発表4 14:40-15:10 仙台におけるW.モリスの受容とその社会主义論

田中史郎 | 宮城学院女子大学名誉教授

発表5 15:10-15:40 「火の川」を渡る

— E・P・トムソンのウィリアム・モリス研究

川端康雄 | 日本女子大学名誉教授

【第3部 モリスと日本】

発表6 15:45-16:15 ウィリアム・モリスの「労働の喜び」論再考

— その宗教的含意をめぐって

島貫 悟 | 東北大学

発表7 16:15-16:45 ウィリアム・モリスと美術・工芸・建築に関する日本人々

— 富本憲吉・柳宗悦・河井寛次郎・濱田庄司・芹沢銈介等と現在の建築関係者

藤田治彦 | 大阪大学名誉教授

【おわりに】

16:45-16:50 大久保尚子 | 宮城学院女子大学

【発表1】

中世観の相違

— ウィリアム・モリスとジョージ・エドモンド・ストリート

江澤美月 | 一橋大学

ウィリアム・モリスは、オックスフォード大学入学当初、聖職者になることを目指していたが、1854年と1855年の二度にわたる大陸旅行で、当時フランスの各地にあった中世の大聖堂を見て感激し、建築家になることを志したことが知られている。彼は1856年、オックスフォード教区の建築家であったジョージ・エドモンド・ストリートの建築事務所に所属しそこでフィリップ・ウェップに出会った。その後まもなく建築家を志望するのを止め、ストリートの事務所を去ったモリスが、ウェップの設計で建てたレッド・ハウスは、初期ゴシック建築であったことが知られている。ジャン・マーシュは、当初レッド・ハウスの内装に無関心であったモリスが考えを改めたのは、ストリートが1858年に行った「イングランドにおける芸術の将来について」と題する講演がもとであったと指摘している。

さらに、フランク・C・シャープは、1877年に古建築物保護協会を設立したモリスが、1879年、イタリアのサン・マルコ寺院の修復に反対するにあたり、ストリートと行動を共にしたと述べているが、モリスの伝記作家フィオナ・マッカーシーは、モリスが同協会を立ち上げた直接の理由として、ストリートが修復を行ったバーフォード教会を見て衝撃を受けたことを挙げている。その後モリスは、1886年、

講演「芸術の目的」で、かつて自分が訪れたフランスのルーアンや、自分が在学中のオックスフォードの街並みに残っていた中世の面影が、建物の修復を受けて今では失われてしまったことを嘆いてもいる。

今回の研究でストリートが、上記の講演で、ラファエル前派も、ゴシック建築も共に中世に回帰していると述べていることがわかった。以上のことを踏まえ、本発表では、ストリートの「イングランドにおける芸術の将来について」とモリスの「芸術の目的」を中心に、両者の中世観の違いを考察した。

【発表2】 13:30-14:00

アーツ＆クラフツの詩

— ウォルター・クレインによる詩と絵画の融合の試み

関 良子 | 三重大学

本発表ではウォルター・クレインの物語詩 *The Sirens Three* (1885) と詩集 *Renascence: A Book of Verse* (1891) に注目し、ウィリアム・モリスによる、エドワード・フィッツジェラルド翻訳の *Rubaiyat* 彩色写本とのあいだの間テクスト性を分析した。モリスの盟友であり、挿絵画家、装飾芸術家として知られるクレインが詩の創作を行なっていたことはあまり知られていないが、彼はロセッティの影響を受けてソネット形式の詩——とりわけ、絵画に寄せたソネット——を好んで書き、モリスの影響を受けて詩と絵画を融合させた作品を創作するようになった。発表では *The Commonwealth* 発刊と同時期に進められた、クレインによるこれらの書物の出版が、モリスの「理想の書物」刊行までのサクセストーリー（つまり、モリスが生涯で何度も詩と絵画の融合を試みた末、ケルムスコットプレスという最高のチームの結成を経て、理想の書物を結実させるに至ったという成功物語）に対して、どのようなサイドストーリーを提供しうるかを考察した。

The Sirens Three は、1885年4月～9月に *The English Illustrated Magazine* に連載された後、1886年にマクミラン社から出版されたが、単行本にはモリスへの献辞となるソネットが添えられており、ソネット前半ではこの作品がエドワード・フィッツジェラルド翻訳の *Rubaiyat* (1859) から着想を得たものであることが、後半ではモリスがバーン＝ジョーンズ夫人に贈った *Rubaiyat* の彩色写本を手にしたときのクレインの興奮が綴られている。*The Sirens Three* はモノクロ印刷ではあるが、絵画・装飾と詩文が絡みあうように配置され、物語はルバイヤート・スタンザで書かれているという点で、モリスの *Rubaiyat* 彩色写本の影響を受けたことは明らかである。一方の *Renascence* は、装飾こそ少ないものの、クレインのデザインで、エマリー・ウォーカーらの製版によるヘッディングとテールピースが多く施され、印刷用紙に和紙を選ぶなど、こだわりが見られる。発表ではこれらの事実に注目しながら、クレインによる詩と絵画の融合の試みが、ケルムスコットプレス設立への道筋に対して、どのようなコンテクストを我々に提供しうるかを検討した。

【発表3】

ラスキンとモリスに見る生の循環の思想

横山千晶 | 慶應義塾大学

美術批評家、社会改良家のジョン・ラスキンが、幼いころから興味を抱き続けてきたものが鉱物である。彼の有名な鉱物コレクションは、のちに労働者大学やオックスフォードで素描を教える際の教材となり、労働者教育のためにシェフィールドに建てた聖ジョージ博物館にも寄贈された。鉱物とは、長年の時を経て自然が作り上げたものであり、自然の記録を封じ込めた存在でもある。しかしながら、ラスキンの描く綿密な鉱物の素描は、その上に新たな生物が育ち、「成長」し続けている。クラスでは時にこれらの鉱物を水の中に入れて異なる環境や光の中で描かせたり、と様々な実験を行っている。学生たちに自然環境にある状態での鉱物を描かせようとしたのだろう。ラスキンの教材は鉱物のみならず、植物や鳥など、自然からの素材で、自ら持ち込むこともあれば、捕獲したての鳥の死骸を手に入れて提供することもあった。これはラスキンが、生と死のはざまにいる鳥を生きている状態に近い状態で描かせる必要性を感じていたからだろう。学生たちはまだ温かみの残るその体に触れながら、その命にも思いをはせる。そして、その羽毛一本にも鳥の命が宿る。この生へのこだわりが、ラスキンの目指した教育の真髄でもあった。

美術批評家・建築批評家としてのラスキンの議論は、この静と動、生と死の循環を基調としている。ラスキンがターナーをあれほど礼賛したのは、止まった自然ではなく、風や動きの感じられる気象と景色の描写ゆえであったし、ラスキンにとっての建築は、作った人々の生の記録以外の何物でもなかった。やがて、この循環と伝達の思想がウィリアム・モリスの古建築保護協会設立へとつながっていった。つまり、時代と生命の証としての建築物をどう私たちの生活の一部とし、生かし、命を全うさせるのかという考え方である。同時にこの生と死の循環と伝達は、モリスの2次元デザインや社会主義思想の中にも活かされていった。今回の発表では、ラスキンやモリスの芸術・教育論やデザインの中に見られる「循環」の思想について論ずることで、その考えがやがてラスキンやモリスの経済論や社会改良の考えへとつながっていった過程を考察した。

【発表4】

仙台におけるW.モリスの受容とその社会主義論

田中史郎 | 宮城学院女子大学名誉教授

周知のように、仙台も「3.11 大震災」見舞われた。そうして中で、W.モリスと宮沢賢治の思想にあやかり、今後の展望を見出す試みが生まれた。それが大内秀明（1932～2024年）を代表（初代）とする仙台・羅須地人協会である。協会の発足が2013年なので、すでに10年余の活動となる。そこで議論をふまえ、モリスの社会主義論を吟味しよう。

モリスは、「アーツ＆クラフツ運動」の創始者であり、しばしば、芸術家、詩人、そして、社会運動家としての3つの面を有していると言われる。だが、モリスは、49歳で「民主同盟」への参加を皮切りに、その後「社会主義同盟」を結成など、成熟期に至るほど社会主義者としての顔を明確にする。機関誌『コモンウィール』に発表された、「社会主義」、「ジョン・ボールの夢」、「ユートピアだより」などの論考は、それまでの活動が社会主義運動に裏打ちされ、またそれを豊富化するものとして位置づけられる。

さて、モリスのマルクス『資本論』に対する1つの問題提起をとりあげよう。この点は大内が指摘し

ていること（『社会主義』、「付録」など）だが、モリスは、『社会主義』第19章において、『資本論』の内容を詳細に紹介するとともに、そこに注を付し疑問を投げかける形で自説を示している。

まず、当該のマルクスの説を示そう。マルクスは、未来社会を「否定の否定」として構想し、その出発点（前資本主義）を「個人的所有」に求め、それゆえ、未来社会は高次元の「個人的所有」の実現になる、と展望している（『資本論』（第1巻、第24章、第7節））。

それに対してモリス述べる。「ここで使われているような語句を誤解しないことが大切である。〈中世期〉における労働は、…精神的な側面から見れば、共同（アソシエーション）の原理によって、きわめて明確に支配されていた。」（『社会主義』197）と。

これは前資本主義社会をどのように位置づけるか、別言すれば、未来社会どのように展望するかをめぐる問題である。モリスによれば、未来への構想の出発点となるのは、「個人的所有」ではなく、「共同（アソシエーション）の原理」により支配された社会だという。そうだとすれば、目指すべき方向性もマルクスとは異なるものになる。必ずしも具体的な社会像を示すものではないが、こうした観点を押さえておくことが必須であると考えられた違いない。なお、こうした視角からのモリス研究は、まだ開始されたばかりである。

【発表5】

「火の川」を渡る

— E・P・トムソンのウィリアム・モリス研究

川端康雄 | 日本女子大学名誉教授

イギリスの歴史家・社会活動家として20世紀後半に活躍したE・P・トムソン（Edward Palmer Thompson, 1924–93）は主著『イングランド労働者階級の形成』（1963）が「下からの歴史学」の鍵入れをした著作としてもっとも知られるが、最初の単行本がモリス研究であったことは意味深長である。『ウィリアム・モリス—ロマン派から革命家へ』（William Morris: Romantic to Revolutionary, 1955; revised 2nd. ed., 1977）はモリスの社会主義者としての足跡を丹念に追った著作として、1955年の刊行以来モリス研究者のみならずヴィクトリア朝期を研究する多くの学徒によって長らく参照してきた。日本では小野二郎（1829–82）がトムソンのこの本に強い影響を受けて、社会主義者モリスとデザイナー・モリスの総合を図る研究を進めたことが特筆される。

副題に「ロマン派から革命家へ」とあるように、青年期のモリスはジョン・キーツらロマン派詩人を愛読し、「ロマン派的反抗」の精神を彼らから継承し、カーライルやラスキンら社会批評から学び、またラファエル前派の画家たちの仕事からも刺激を受けつつ、デザイン制作という面から「時代に対する聖戦」を挑んでいった。それが1870年代半ばを過ぎて東方問題をめぐっての自由党急進派の立場からの反戦運動を端緒に政治活動に参入し、1883年には社会主義者たることを宣言し、マルクスの『資本論』を読み、論説文の執筆や街頭演説などを通じて精力的に活動を続けてゆく。「ロマン派的反抗」精神がその展開を用意したものではあるが、社会主義運動に至った際に大きな転回を遂げたことをトムソンは「火の川」の横断という比喩で表現した。トムソンのこの書物は初版刊行後70年をへて2025年に邦訳刊行される（川端康雄監訳、田中裕介、星野真志、山田雄三、横山千晶共訳、月曜社）。本発表では、その機

会に、またトムソンの生誕百年を記念して、本書の意義を歴史家・社会活動家としてのトムソン自身の経験と併せて検討した。

【発表6】 15:45-16:15

ウィリアム・モリスの「労働の喜び」論再考

— その宗教的含意をめぐって

島貫 悟 | 東北大学

英文学者の寿岳文章は1934年に著した論考「ウィリアム・モリスと柳宗悦」（原題：「二つの工藝論 — モリスと柳宗悦」）において柳とモリスの工藝論を比較し、その共通点と相違点を分析した。とりわけ寿岳は両者の主張の最大の相違がその宗教性の有無にあったという理解、すなわち柳の工藝論はその核心に深い宗教性を有していたのに対し、モリスの工藝論にはそうした宗教性がなかったという理解を示し、モリスより柳の工藝論を高く評価した。寿岳により示されたこうした理解は、その後バーナード・リーチや倉敷民藝館初代館長を務めた外村吉之介らに受け継がれ、藤田治彦氏が指摘するように、半世紀以上にわたり柳モリス比較論の基調を形成するものとなった。

近年、柳とモリスを中心とした民藝運動とアーツ・アンド・クラフツ運動の関係については、本格的な比較研究が相次いでなされ、理解が深められてきた。しかし、寿岳の着目したモリスと宗教との関わりについては、英米のモリス研究においても取り上げられることは稀であり、モリスは宗教に懐疑的な社会主義者であったという見方が一般的である。それゆえ、結果的に、柳の工藝論には宗教性があるのに対し、モリスの工藝論には宗教性がないという寿岳の理解も、その後十分に検証されることなく現在に至るまで引き継がれてきた。

今回の発表では、以上の経緯を確認した上で、寿岳による理解の妥当性を再検討するため、モリスの工藝論が実際には宗教の問題とも接するものであった可能性を検証した。特に、モリスは近代キリスト教のあり方を批判的に捉えていた一方で、宗教そのものを否定したわけではなく、社会主義が実現した未来社会においては、「社会主義の宗教」という革新的思想が現れることを理想としていたことを確認し、「藝術とは人間が労働の中で感じる喜びの表現である」というモリスの工藝論における中心的命題が、そうした宗教的理想的と結びついていたことを示した。なお、以上の発表は、拙著『ウィリアム・モリスと柳宗悦 — 工藝論にみる宗教観と自然観』（東北大学出版会、2024年）の内容に基づくものである。

【発表7】

ウィリアム・モリスと美術・工芸・建築に関する日本人々

— 富本憲吉・柳宗悦・河井寛次郎・濱田庄司・芹沢銈介等と現在の建築関係者

藤田治彦 | 大阪大学名誉教授

ウィリアム・モリス (William Morris, 1834-96) は建築を学び、その後、絵画や工芸の制作を重視しアーツ・アンド・クラフツ (Arts and Crafts) 制作の中心者になるが、以前 1877 年から古建築物保護協

会 (SPAB) を開設し絵画・工芸・建築等すべての芸術を大切にした。

Arts and Crafts の名称はモリスの設置ではなく、コブデン＝サンダーソン (T・J・Cobden-Sanderson, 1840-1922) の提案で Arts and Crafts 展覧会協会の名称を設置した。但しコブデン＝サンダーソンもモリスを重視し、モリスは 1891 年から没年の 1896 年まで Arts and Crafts 展覧会協会の会長になり、モリスが Arts and Crafts の中心になっていた。

モリスが中心のモリス・マーシャル・フォークナー商会 (1861-1875) やモリス商会 (1875-) では、単数制作や量産制作も設置されていた。建築は単数制作が中心だが、モリスの商会では量産制作も大切にしていた。日本では 1926 年に柳宗悦 (1889-1961)・富本憲吉 (1886-1963)・河井寛次郎 (1890-1966)・濱田庄司 (1894-1978) らが設置の「民藝」(日本民藝美術館設立趣意書) は単数制作が基本だが、英国の Arts and Crafts も量産だけでなく単数制作も重視し、「民藝」と英米に多数設置された Arts and Crafts は共通の名称とも言える。

富本憲吉は 1896 年にロンドン市内に設置された「セントラル・スクール・オブ・アーツ・アンド・クラフツ」の夜学に通い、ステンドグラスの実施等を学んだ。この学校の名称 Arts and Crafts は同年死亡のモリスを注目して開設されたとも言える。

日本の民藝関係の人々は建築も大切にしていた。民藝の中心とも言える柳宗悦も東京駒場の日本民藝館を設置し、芹沢銈介 (1895-1984) は東京高等工業学校の建築科ではなく工業図案科を卒業し染色制作が中心だが大原美術館工芸館の建物を多数設置したとも言える。

宮城県仙台市のせんだいメディアテークや東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館などを確認してみれば、美術と工芸と建築を興味深く見て、世界の美術・工芸・建築を確認できる。美学や美術や藝術等に関係する人々は、建築にも興味を持っている。

伊東豊雄氏 (1941-)・妹島和世氏 (1956-)・隈研吾氏 (1954-) は日本と世界各地に建設している。隈氏は磯崎新 (1931-2022) や伊東氏や妹島氏とも異なり、現代だけでなく歴史や自主制作も重視し、工芸作品等も日本や外国のフランス南部にも設置している。
